

曹大峰 教授/曹大峰 教授

北京日本学研究中心 センター 元副主任/北京日本学研究中心 原副主任

日 時 : 2022 年 4 月 7 日

場 所 : 北京日本学研究中心 センター

使用言語 : 日本語及び中国語

聞き手 : 野口裕子

(国際交流基金北京日本文化センター)

時 間 : 2022 年 4 月 7 日

地 点 : 北京日本学研究中心

使用语言 : 日文、中文

采访者 : 野口裕子

(北京日本文化中心 (日本国际交流基金会))

【目次】

1. 日本語との出会い、そして教師に
2. 初訪日
3. 「大平学校」の思い出
 - (1) 入学の経緯と「大平学校」の様子
 - (2) 主任 佐治圭三先生
4. 研究の変遷
 - (1) 3 つの時期
 - (2) コーパスについて
 - (3) 日本語教育と教材開発
5. 日本の研究者と交流して
6. 北京日本学研究中心について
7. 日本語教育と日本研究
8. 今後の日本研究について

【目录】

1. 与日语结缘，成为日语教师
2. 首次访日
3. 回忆“大平班”
 - (1) 入学经过与“大平班”的情况
 - (2) 主任 佐治圭三老师
4. 研究的变迁
 - (1) 3 个时期
 - (2) 关于语料库
 - (3) 日语教育学与教材开发
5. 与日本的研究者的交流
6. 回忆北京日本学研究中心
7. 日语教育和日本研究
8. 关于今后的日本研究

【本文】

※インタビュー対象者の使用した言語に基づいて整理しています。(下線部は日本語でのご発言部分)/根据采访对象所使用的语言来整理。(下划线部分为受访者用日语发言的部分。)

1. 日本語との出会い、そして教師に/与日语结缘，成为日语教师

和日语的首次接触应该是我中学毕业后，下乡到济南市郊区农村，然后又在农村推荐上大学的时候。我上大学是 1971 年，是推荐上大学的。当时我在中学里面的英语成绩还不错，他们就说，“那你就学外语吧，学日语怎么样？”我当时说“还不错”。为什么呢，因为学日语比学英语感觉容易一些，有汉字，有点亲切的感觉，然后上了山东大学，学了日语。对于我学日语，周围好像没有太大的反应，没有反对。因为学习日语的人非常少，所以大家都觉得比较吃惊，说，“哎哟，还有日语这样的专业”。我父母过去和日本打过仗的，但他们也没有反对。他们觉得打仗是当年的事嘛，现在中日交流需要人才，没什么问题。没有说过反对这样的话。

山东大学日语专业应该是 1970 年成立的，我上大学是 1971 年，我们当时是在曲阜上的，因为山东大学和曲阜师范大学合并，曾被迁到曲阜，后来又迁回到了济南。

我当时上大学的时候还真没有日语老师。老师都是以前学过日语的，而且是从别的学校借调来的。山东大学日语专业原来没有老师，从大连外国语大学日语学院请了一位老教师，让他一直教我们日语。他带来了几个刚毕业的学生，这些年轻老师也教过我们。

上了大学之后确实比较担心，毕业以后究竟干什么工作？搞不清楚。所以大二那年（中日）邦交正常化了，我感到非常地高兴。因为我们平时学日语，非常关注中日之间的事情，而且我们为了练听力，听日本的广播，这样就通过各种途径首先了解了邦交正常化的消息。同学们很高兴，兴奋倒是没有表露得那么激烈，但是心里很高兴，觉得这会儿学了日语可能会有用了，将来可能会有事情可以做了。

我们上课的时候到青岛实习。青岛是港口，那时听到的是日本海员的日语，海员一般都是男的，所以我们听到的都是日本海员的男性的日语。我们在青岛港口实习时，请了当地的老师，很幸运的是当地有一位从日本回来的华侨老师。这位女老师，她的日语非常漂亮，她给我们上课，我就被她迷住了，讲课讲得非常好，人也长得非常漂亮。日语讲得也非常地道，应该是我第一次接触日本女性的日语。后来我们又听 NHK，日本放送协会的广播，那个发音非常好听，我的口语发音基本上都是跟着这些录音学的。我们一句一句地听，完了之后把它背下来，背完了之后我的日语音韵就形成了，也就学会了，口语基本上就这样学的。

我顺利地在大大学完了日语。毕业时，在山东省有一个中日合作的石油化工厂，我想到那儿当翻译。可是当时大学里特别缺日语老师，因此学校就说，“你留下来当老师怎么样？”我想，“哎呀，我想当翻译，但学校让我留下来。也行”，我就留下来在山东大学当了老师。从此以后就当了一辈子的老师。

之后开始进行研究，经历就比较多了，包括到日本留学，搞一些合作研究，最后从山东大学调到了北京外国语大学。整个就是这么一个情况。

2. 初訪日/首次访日

第一次去日本是做翻译，因为当时确实缺翻译。中日邦交之后，两国的在企业经济方面有一些实际性来往，包括中国的企业到日本的企业参观学习，学习新的技术，就有了一些交流。正好企业交流找不到日语翻译，就到学校来问“能不能派位老师作为翻译？”学校就派我去。我当时非常高兴，第一次去日本。接触的都是日本工厂里的工人，公司的职员，感到非常亲切。

当时和日本的工人几乎就是住在一起。一开始住在宾馆，后来就住在工厂附近的“社員寮”——工人宿舍学习。跟工人接触印象很深刻，他们非常客气，而且和我们之间没有太大的差别，特别是他们请我们到他家里做客，就是和他的孩子，夫人见面，我们有一种亲切感，非常亲切的一种感觉。我感觉中国和日本的距离没那么远。一开始，他们非常客气，我们也友好，非常热情。后来在工作当中，发生了一些不同的意见，我们也能够很好地去交流，互相的理解，给我一种非常舒服，非常好的感觉。非常友好，和我们没有什么距离感。

还有日本的风景非常的迷人，他们也请我们去看日本的风景，留下了非常深刻的印象。因为当时时间比较短，主要的感觉上就是这些。日本非常干净，走到哪里都没有灰尘。再一个就是发达。近代化の日本を本当に体験で、わかった、ということです。

3. 「大平学校」の思い出/回忆“大平班”

(1) 入学の経緯と「大平学校」の様子/入学经过与“大平班”的情况

我们在学校感觉到，邦交正常化之后中国有个日语热，日本語ブーム。大家都来学日语。缔结友好条约之后有个明显的变化，就是从学习日语到开始研究日语，开始提高日语的水平。这个时候我第一次接触了国际交流基金的“巡回セミナー”。こういう国際交流基金の巡回セミナーは各大学のリーダーが集まって研修するプロジェクトですけれども、その時は私は研究室の若い教師だったので、私たち若い教師は参加することができなくて、戻ってきたリーダーの先生からその話を聞きましたら、とても感動して、うらやましくて、憧れを持っていました。いつか私もそういう巡回セミナーに参加することができればという風に夢に見ていたんです。

その後、(機会が) 回ってきたのが「大平学校(注:「日本語研修センター」)」の開講ですね。各大学に連絡があって、大平学校の研修員を募集していました。リーダーの先生たちは巡回セミナーに参加したことがあるので、この機会は私たち若い教師に回されてきたわけです。何人かの先生と一緒に試験に参加して、試験を突破して山東大学から二人選ばれて、1980年の9月か8月の末ですけれども、北京語言学院の大平学校に参加しました。

(研修員は) 全部大学からの先生ですけれども、中には非常に年寄りの先生もいたり、私たちのような卒業したばかりの若い先生もいたりして、とても賑やかな環境だったんです。日本からもとても強力な教授陣がそろって来られたわけですが、私たち研究員のその時の学習ぶりといえば、私はいつも言っているんですけれども、「むさぼるように」勉強してきました。中国の日本語教育は「語学」から「学問」へと発展する時期で、私たちは如何に高い日本語のレベル、あるいは研究能力を得るのか、それを求めているところで、日本から選ばれてきた優れた先生の授業の内容は、私たちにとって宝物のようなものでしたので、私たちはむさぼるように勉強したんです。

一か月ほど国際交流基金のお招きで訪日研修もしました。その時はいろんな大学で授業見学をしたり、実際授業を受けたりして、それから大学の学生さんとの交流もありました。そして日本の各地の名所旧跡を見て、いろいろ日本文化も体験いたしました。その時の京都大学の学生さんだった田野村忠温さんは今は大阪大学の有名な教授になって、今でも付き合っています。ご専攻は日本語学ですけれども、コーパスとかコンピューターにもすごく詳しいですので、時々中国にも来て授業をしていただいたりしています。

大平学校で一つ印象深いのは、先生たちのチームワークです。みんな友誼賓館に泊まっていちゃったんですけれども、私たちは時々招かれて先生たちの住んでいるところを訪ねたり、一緒に食事したりしていました。そのチームワークは本当に家庭のような感じだったので、本当に印象深かったんです。学問ばかりではなくて、人間同士の付き合いもいいなあという感じがいたしました。

(2) 主任 佐治圭三先生/主任 佐治圭三老师

一番印象深かったのはやはり主任の佐治圭三先生です。佐治先生は日本の職をやめてですね、中国に5年間か6年間来られて、そして日本から優れた先生をたくさんお招きして北京に来ていただいて、一緒に仕事されたわけです。

（佐治先生の思い出は）たくさんあります。先生はまさに私が言った先生方の代表者として、学問は本当に精通していらっしゃるし、人に対するあたたかさですね。佐治先生が亡くなられるまでは、先生と奥様とずっと付き合っていて、現在も奥様と手紙などでお付き合いがあります。北京にいらっしゃったときはいろいろとお世話になりましたが、もっと感動的なのはそれ以降ですね。先生がこの仕事を終わって日本に戻られて、私たちが（日本に）行く時に先生に連絡したら、どんなに忙しい時でも必ず私たちに自分の家に誘って、奥様がおいしい料理を作ってくださって、一緒にお酒を飲みながら交流していたことですね。また先生は日本の名所旧跡があるところにホテルを予約して、私たちをそこに呼んでくださったりして、いろんな交流もしてきたんです。先生の人となりは私たちの一つの前進の原動力になった、これこそ教育者であるということを感じました。もちろん私たちも先生に倣ってなるべくそういうことをしようと思ってきたんですけれども、そういう風に影響を受けております。

実際先生ご本人には聞いていないんですけれども、そばから見ていて一種の「使命感」ということでしょうか。やはり自分は自分だけではなくて、社会の一員であり、日本という国の一員であるというような先生のお気持ちは本当に感じ取ってまいりました。私もそのような先生になりたいという素朴にそういう思いもわいてきたわけです。

大平学校は国際交流基金の大きな事業としてやってきたんです。最初はやっぱりいろいろな付き合いとか交渉とかあるでしょう。やっぱりそういう心の大きい方がいないと、いろんなところでたぶん躓いたりして、順調にはやってこれないと思います。佐治先生は心が大きい方で使命感を持っているからこそ、大平学校が成功し、その後の北京日本学研究中心もあってですね、国際交流基金の事業は目標どおり、あるいは目標以上になってきたんじゃないかと。どんなに立派な事業でも、現場にいる人間はすごく大事ではないか。同じように国際交流基金にもそういう方がいらっしゃいますよね、今のような成果になってきたんじゃないかと思っています。そのことはつくづく、付き合ってきて感じているんですけれども、大平学校の時も外務省の方も基金の方も付き合いがあったんで、その時から色々感じて、やっぱり人と人の交流はすごく大事なことではないかと思っています。

4. 研究の変遷/研究的変遷

(1) 3つの時期/3个时期

研究のテーマはだいたい発展的に言って三つぐらいあります。最初はやっぱり、中国は日本文法の知識が足りないの、日本語の文法の勉強をしました。ちょうど大平学校時代から文法研究会がありまして、参加しました。大平学校が終わりましたら、大平学校から推薦されて文科省の奨学金をもらって、東京外国語大学の大学院に留学しまして、その時は文法中心だったんで、戻りまして日本語文法の研究をずっとやってきました。

その後はやはりコーパス。大阪大学にモダリティの研究で仁田義雄先生というとても素晴らしい先生がいまして、ぜひその先生の所に勉強に行きたいという夢があったんですね。それで、国際交流基金のフェローに申請して、許可されて大阪大学に2年近くいました。この時、ちょうど日本では皆さんコンピューターを使い始めたところで、私は大阪大学の研究室の先生のコーパスの研究プロジェクトにも参加したりして、コンピューターにもコーパスにも興味を持ち出しました。私も Windows98 シリーズのコンピューターを買って持ち帰って、以降はコーパスをやりました。北京日本学研究中心（注：以下、「セ

ンター」)のシンポジウムで如何にコンピューターを使って日本語を研究するのかという話をして、その中身を文章にまとめて『日本学刊』という中国日本学会の雑誌にも投稿しまして採用されましたら、センターの方から「あなたはコンピューターに強いからセンターに来ないか」と誘われて。センターと一緒に、普通の日本語のコーパスだけではなくて、中国語との対訳ができるようなコーパスを一緒に作ろうという話になったんです。おかげでセンターに移ることができまして、コーパス言語学というような学問をやってきました。

その後は日本語教育学です。日本語教育学をやりだしたきっかけもセンターとすごく関係があります。センターではその時は日本語教育学コースはなかったんです。日本語教育については、日本語学の中で教えたり、勉強したりしてきたんですけども、日本語教育を一つの学問として教えたり人材を養成したりするようなところは中国ではとても少なかった。それで、センターは日本語教育コースをやりましょうということになりました。

それで、私は日本語学の方から日本語コーパス、日本語教育学、この3つの学問をやってきたわけです。

(2) コーパスについて/关于语料库

コーパスというのは言葉のデータベース、中国語では「语料库」、言語の資料の倉庫という意味です。言葉の資料をコンピューターで集めて、処理できるようなものです。コンピューターで日本語を調べたり、その中からいい例文を選んで学生に教えたりすることができるのは全く面白いなと思って、コーパスの制作や応用を始めたわけです。その次は日本語と中国語の対訳ですね。日本語を調べてどのような中国語に訳されたのか、コーパスで調べたらいっぱい出てきて、授業にも使えるし研究にももちろん使えます。

最初に作ったコーパスは中日対訳コーパス。これは世界にもないので、中国では国家プロジェクトになりまして、国家社会科学基金の助成を申請したら本当に順調に通りました。国際交流基金の支援もいただきまして、そのコーパスを作ったんです。作ってからも今までももう20年近くですけども、今まで、まだ、中国、日本、あるいは世界で活用されています。

日本語教育を研究することになってからは、日本語教育にも利用できたらと思って、やはり中国初、あるいは世界初の日本語教育コーパスというものも作ってきました。当時中国で使われていた主な4種類の教科書をコーパスとしたので、一度検索したら4種類の教科書の内容が(検索されて)出てくるということですので、教科書利用とか、教科書研究にも大いに応用できるようなものとして、中国の皆さんから喜ばれました。

それ以降は、皆さんがたくさんコーパスを作られるようになって、応用されつつあります。教科書コーパスも、日本の方で日本にある日本語の教科書がコーパスとして使えるようなものができてきました。他の国でもたぶん、同じように自分の国の言葉と日本語との関係を見て対訳コーパスを作ったり教科書コーパスを作ったりしているのではないかと思います。私たちは最初なので、なるべく皆さんに使っていただけるようにいろんな工夫をしてきました。たぶん皆さんはそれを使ってみて、自分でも自分に合うようなものを作ろうという風になってきたのではないかと思います。

(3) 日本語教育と教材開発/日语教育学与教材开发

北京日本学研究中心に来てからは、日本の学者とか日本の企業の方とか国際交流基金の派遣の方とか、いろいろ交流ができて、いろんなプロジェクトやってきました。さきほどのコーパスの話でも、日本の研究者が入っていろいろご支持、ご指導くださったわけです。

ここに持ってきた大きな本ですけども、教科書（注：曹大峰总主编：普通高等教育国家级规划教材《高等院校日语专业基础阶段系列教材》，高等教育出版社，2011-2016）です。日本の先生たちと一緒に、あるいはこのセンターとのネットワークで中国の各大学の先生と協力して、23冊ものシリーズの教科書を作ってきました。これは教科書コーパスを踏まえて、コーパスよりももっといいものに作ってきたんです。

こちらは『日本語教育基礎理論と実践』のシリーズ（曹大峰总主编：《日语教育基礎理論与实践系列丛书》（全八卷），高等教育出版社，2014-2016）です。中国の日本語教育コースの大学院がだいぶ増えてきたのですが、資料がないので、センターに派遣されてきた、あるいはセンターとのネットワークで関係のある先生方と、こういうシリーズものの教科書も作ってきました。もちろん国際交流基金のご支援で、企画にも入っていただいて、高等教育出版社と一緒に作ってきたわけです。

5. 日本の研究者と交流して/与日本的研究者的交流

多くの先生に本当にお世話になって、いろんな面から影響を受けて、エピソードもいろいろありますが、総じていえば、日本の先生方が学問に精通されていることはもちろんですけども、その一方で教師として、教育者としての人格というものからも深く影響を受けました。非常にまじめで、学生との付き合いをすごく大事にしてですね。私の運が良かったのか、良い学生がたくさん育つ研究者との付き合いが割とあったんです。その中で一つ例としていえば、大阪大学の仁田義雄先生。今はもうご定年になっていらっしゃるんですけども、その学生さんは今、ほとんど日本の各大学で活躍しています。お弟子さんは多いですけども、最近よく付き合っている先生を例に言う、一橋大学の庵功雄先生です。庵先生が大学院博士課程にいた時に、私はちょうど大阪大学にいましたんで、一緒に勉強したり、コーパスを作ったりして。以降はずっと長くお付き合いしてきました。

それから、仁田先生とその仲間たちの研究会も参加したら、本当に日本の研究会という雰囲気、お互いの身分とか考えないで、学問だけを議論をしているという雰囲気に本当に感動しました。

もちろん、学生の生活とかにすごく関心をもって、あたたかいご援助をしてくださる先生もいらっしゃいました。本当に素晴らしかった。本当にお世話になりました。

6. 北京日本学研究中心について/回忆北京日本学研究中心

私がセンターにつながりを持つようになってきたのは、大阪大学の客員研究員時代からコーパスをやったですね、センターに「コーパスをやりませんか」というお誘いをいただいて、その後いろいろ努力して、やっと来たのが2000年。その時のセンターは日本側のスタッフ（注：教師）が多くて、中国側のスタッフが少ない。当時のセンターの主任の厳安生先生は、やっぱり中国側のスタッフもいないと長くやっていけないと。日本（注：国際交流基金）側からも「現地化」というお話が出まして、私がセンターに来てからの大きな話は現地化でした。私もまさに現地化のおかげでセンターに来たわけですけども。私の後に、日本で博士号をとってきた張龍妹先生とか郭連友先生とか譙燕先生とか、新しい方がセンターに入ってきたわけです。それで、センターが少しずつ現地化されて、日本側の先生はだんだん少なくな

って、今のようになってきたわけです。

それから事業としても一つ大事だったのは、制度の現地化ですね。それまでは日本のやり方でいろんな制度があったんですけども、やっぱり中国の現状に合わせて新しい制度を作っていかなければならない。それで、その制度作りも日本側の先生、主任、副主任の方、国際交流基金北京事務所の方と一緒に相談しながらやってきたということです。

もう一つは日本語教育コース。先ほども紹介しましたがけれども、その時は中国の日本語教育は人材が非常に足りない。特に研究者が少ないということで、日本語教育コースを作りたいということで、厳安生先生から「あなたは日本語学から日本語教育コースづくりの方に回ってこないか」という相談がありました。じゃあ私は素人ですけどもやりましょうと。使命感があったんで。日本語教育コースを、日本側の先生、特に（国際交流基金）北京日本文化センターの横山紀子先生とか篠崎摂子先生と一緒に、日本語教育コースの制度とかやり方とか一緒に議論しながらやってきたわけです。これが日本語教育コースです。

もう一つ、その後は、中国では学科建設という話になりまして、各大学で重点学科とかを作りたいと。北京外大でも重点学科を作りたいということで、私たちはこれまでの蓄積を踏まえて、重点学科申請のための条件を整えるように、積極的に努めてきました。おかげで、センターと北京外大の日本語学部、一緒になって、国家重点学科への申請をして、成功したわけです。今でも重点学科が非常に少ないですけども、北京日本学研究中心と日本語学部の重点学科認定は、日本語教育・日本研究の分野では中国で初めてのことです。

それ以降、いろんな変化といいますと、その時はちょうど中日間は何事もなく割と安定的に関係が維持されてきたんですね。そのシンボルとして、センターの新館の話がでてきたわけですね。センターの事業も順調に進んできたし、大きな事業として新しい建物を建てると。新館の中にいろんな設備を入れるということ、図書館を充実させるとか、そういう仕事にも参加してきました。本当に中日間の関係が良かったおかげで、これだけセンターが発展して、全中国の皆さんが利用できるようになってきたわけです。

民間の支援はいろいろありましたんですが、三菱商事さんとかトヨタさんとか、いろいろ支援があつてですね。要するにセンターが発展してきて学生がたくさん入ってくるとなると、訪日研修のための国際交流基金の経費が足りなくなったんで、その空白を日本の企業にいろいろお願いして、本当にありがたく埋めてくださったので、センターの学生がほとんど全員日本で研修することができるようになってきたわけです。そのために、いろんな交流会とか、見学とかで、私たちの方から進んで学生たちを企業の方へ案内してですね、日本企業の中国事業などもいろいろ勉強、まあ学生に知ってもらうようにしたわけです。学生が個人的に自分の論文のために企業の調査などもご支援いただいたりしたこともあったんじゃないかと思います。

7. 日本語教育と日本研究/日语教育和日本研究

中国の日本語学習人口が2000年に入ったら急に増えてきたんですね。これは世界トップで、また、中

国国内での外国語学習者の中で英語に次いで2番目になってきた。これだけ日本語学習する人が増えてきてですね、どのように有効に学習したらいいのかとか、日本語教育は何のためにあるのかとかいうことを考え、研究する人間が必要ではないか、そういう意味でセンターの日本語教育学コースの存在が重要かと思います。そして、日本語教育の中で、いかに日本研究に役立つような人材が育ってくるのかも含めて、私たちはいっぱい研究をしているし、そういうような本とか教科書も作っているわけですけども、そういうような部分はまさに日本研究の基礎の部分です。日本語を知らない、あるいは日本の知識を持っていないと、日本研究は始まらないじゃないかと。あるいは日本語を深く知っているからこそ日本研究が深くできるのだといわれていますので、日本語教育の存在が大きいのではないかと思います。現実もそうです。最近の日本研究の若い方を見ても、最初に日本語教育を受けてきた人が多いです。

日本研究はすごく大事な分野だと思います。日本と中国は今、近隣国でもありますし競争相手でもあるようになってきたわけですね。やはり時代が変わるにつれて、学問としては対応していかなければならない。そういう意味での日本研究は毎日のようにどんどん新しい課題が出てくるのではないかと思います。そういう意味で、日本研究の重要性は、今まであって、これからもあると思います。まさに今の世界とか今の時代は、やはりこれまでと違っている特徴がありまして、その特徴に対していろいろ研究をしていかないと、お互いに分からなくなってしまうし、相互理解もできなくなってしまうし。その結果はとても危ないじゃないかと。それで、相互理解を深めお互いに知り合って、うまくやっていくためには日本研究が必要です。日本にとっても中国にとっても世界にとっても、ぜひ必要なことかと思っています。

8. 今後の日本研究について/关于今后的日本研究

今年は中日国交正常化 50 周年、国際交流基金の設立も 50 周年を迎えてこられたわけですけども、まさにこの時期に歴史を振り返って良い経験と教訓を踏まえて、周りの世界の一時的な状況を大目に見てですね、これからの世界の発展のために新しい目標を決めて、新しい出発をしていくための時期ではないかと思っています。いろんな困難とかいろんな問題とかありますけれども、それは一時的なもので、歴史から見ると、やっぱり長いのはお互いに平和で友好的な時代ではないかと。だから、私はこれからの日本研究と中日関係も期待しています。

最後に補足としては感謝の気持ちですね。国際交流基金の 50 周年、とてもめでたい時期ですけども、本当に国際交流基金は世界で、あるいは中国で、いろんな有意義なお仕事をなさって来たと思います。

公開：2023 年 4 月 27 日

ⁱ 曹大峰《利用因特网进行日本研究——入门经验及有关技术问题》，《日本学刊》1998/1，中華日本学会，1998